

---

# Role Playing Girl!!

なべしき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Role Playing Girl!!

### 【Zコード】

Z2225Z

### 【作者名】

なべしき

### 【あらすじ】

「押入れを開けたら、ウバメの森でした」  
世界は、人間とモンスターと一緒に暮らす世界。

迷い込んだ世

草むらから飛び出してきた巨大な芋虫に涙目になつたりしつつコガネのゲームコーナーでバイトして、ようやく慣れてきたと思ったのに……生まれて初めてゲットしたポケモンが極度の方向音痴！？  
ケーシィのテレビでジョウト各地を不本意に冒険する、ポケモンを知らない主人公の異世界トリップ。  
はたして彼女はバイト先……いや、元の世界に帰れるのか！？

以前サイトに載せていたネタの再掲載です

## ウバメのもり

遊びにきた親戚の男の子（たっくん。5才）の子守りをする」とことなつた。

おねえちゃんかくれんぼしようとせがまれたのでとりあえず押し入れの中に隠れたが、いくら待てども鬼のたっくんは探しに来なかつた。

痺れを切らせて押し入れの戸を開けて、絶句した。

森だ。

何故かわたしは鬱蒼と木々の生い茂る森の中にいた。いや、正確には森の中にある小さな古びた祠の中で体育座りしたまま固まつていた。

罰当たりなのでとりあえず祠から出て森を歩いてみることにした。が、五分もしないうちに後悔した。

森には見たこともないような巨大な芋虫や巨大な蛾のような生き物がうじやうじやいたのだ。草むらから緑色の芋虫やら蛹やらが飛び出してくるたびに情けない悲鳴をあげる。

すっかり涙目になつていたところに、大きな麦わら帽子をかぶつて虫取り網を持った少年が現れた。救世主の登場である。少年はわたしにスプレーのようなものをかけると、森の出口まで案内してくれた。

「キヤタピーにビビつて泣くなんて姉ちゃんだつせーー！」

少年はわたしの話を聞いて笑つていたがわたしにしてみたら全然笑い「じじやない。あんな巨大な芋虫、常識的に考えてあり得ない。ビクビクしながら少年の道案内に従うが、不思議なことに、少年と

一緒に歩いているとキャタピラと名前らしい巨大な芋虫も、トランセルといつらしい蛹も飛び出してこなかつた。少年曰わくさつきわたしにかけてくれた『むしょけスプレー』のおかげらしい。

「姉ちゃん、むしょけスプレーも知らないの？」

むしょけスプレーじるが、じるがじるかも知らない。

森の出口で少年にお礼を言つて別れた。森を抜けると開けた道に出た。ハイキングでもできそくなくらい縁豊かで、ボーアスカウトのような格好をした子どもたちの姿もあつた。光があまり届かない薄暗い森の中からは分からなかつたが、外はとてもいい天氣だつた。ここはどこなのだろう。

民家の前に優しそうなおじいさんが立つてていたので道を尋ねると、わざわざ家の中に戻つて地図を持つてくれた。

これで自分のいる場所がわかると喜んだが、すぐにその希望は消えた。地図に記されている地形も地名もわたしの記憶にあるものとは大きく異なつていたのだ。タウンマップを握りしめて呆然としているど、おじいさんが申し訳なさそうに言つた。

「すまんが、カントー地方のタウンマップは持つてなくての…」

関東地方？聞き覚えのある単語にわたしの胸に希望が生まれた。真つ暗だつた目の前が明るい光で照らされたような感覚。今いるところはジョウウト地方といつらしい。ほかにもホウエン地方という場所があるらしいが、どちらも聞いたことがない。やはりカントー地方、そこに行けば家に帰れるかもしれない。

おじいさんに礼を言つてタウンマップを返そつとすると、いつかまたここに寄つた時に返してくれればいいと言つてタウンマップを貸してくれた。有り難くお借りすることにした。

「行くあてがないなら、とりあえずコガネの街に行つたらどうかの？あそこはジョウト一番の都會じゃし、何か手がかりも見つかるかもしねん」

おじいさんの指差す先に、遠く、高層ビルと電波塔がそびえ立つて  
いるのがかすかに見えた。

## 『ガネシティ

景品交換所の鍵を開けて、棚にならんだモンスター・ボールに挨拶をするのがわたしの毎朝の口課である。

「おはよー。ケーシィ」

ケーシィという名前のそのポケモンは小さく頷いたように見えた。

わたしがここ、『ガネシティ』にやつて来て一ヶ月ほどたつた。『ガネ』に着いたわたしはまず、当面の生活費を稼ぐために仕事を探した。『ガネシティ』は大都会である。幸いなことに仕事はすぐに見つかつた。ゲームコーナーで『コイン』と景品を交換する係員のバイトだ。右も左もわからない世界での生活はあつという間に過ぎていった。まさに光陰矢の如し。

家に帰る手がかりは見つからなかつたが、働きながらわかつたことがひとつだけある。

この世界はどうやらわたしの元いた世界とは違う世界かもしれないということだ。

その事実をわたしにまざまざと知らしめたのは、『ポケットモンスター』…縮めて『ポケモン』という存在だった。

この世界に住んでいる人々は当たり前のようにポケモンと呼ばれる生き物と一緒に暮らしている。

ポケモンは世界に数百もの種類が存在し、人々はそのポケモンをペットのように可愛がつたり、仕事のパートナーとして一緒に働いたりしている。ポケモン同士を闘わせる競技のようなものも存在するらしい。人々はポケモンを『モンスター・ボール』というカプセルに入れて持ち歩く。その手軽さのためか、ポケモンは子どもからお年

寄り今まで老若男女をまざまな世代の人たちに親しまれている。

わたしはポケモンなんて知らない。

わたしの世界にそんな生き物いなかつた。よつてこの世界はわたしの住んでいた世界とはまったく別次元の世界だといつ認識をせざるを得なかつた。

と、いうことはつまり『カントー地方』もわたしの知つている『関東地方』とはまったくの別物である可能性が高い。しかしあたしは希望を捨てなかつた。そんなの実際に行つてみないとわからないじゃないか。とりあえず今はゲームコーナーのバイトを続けてカントーに行くお金を貯めようと思つ。行つてみて、やつぱり違つたら、そのときはそのときで、またそこから考えればいいや。

そんなふうに気楽に考えられるくらいわたしはこの世界の生活に慣れてきていた。そしてやつぱりそれにはポケモンの存在が大きく影響していた。

いつの間にかわたしは、この世界の人たちと同じようにポケモンに親しみを感じていたのだ。

## ゲームコーナー

「おはよう、ケーシイ。今日こそ誰かにも会ってもらいたいといいね」

今日も毎朝の日課でわたしの一口が始まる。

景品交換所はコガネの街の繁華街、カラフルなネオン輝くゲームコーナーの中に併設されている。

ゲームコーナーにはスロットがあり、お客さんはそのスロットで稼いだコインをこの景品交換所で目当ての景品と交換するのだ。まあ、わたしの世界でいうパチンコみたいなものだと思う。だが、あくまでゲームなので小さな子どもでも遊べるところがパチンコとは違う。『安心・健全・街のみんなの遊び場』というキャッチコピーで街一番の娯楽施設になっている。

景品はグッズやポケモンバトル用のアイテムなど、ほとんどがポケモン関連のものである。そしてなんと、ポケモン自体も景品として棚に並べられているのだ。はじめて見たときはとても驚いた。生き物を景品にして大丈夫なのだろうか。愛護団体的な組織が反対運動に押しかけてきたらどうしようと不安だったが結局は杞憂だつた。それどころか景品のポケモンにはとても珍しくなかなか手に入らない種類がいるらしく、そのポケモンが目当てのお客さんはみんな血眼になつて「コインを集めている。珍しいだけに必要なコインはちょっとやそつとの枚数ではない。」この一ヶ月だけでいつたい何人のポケモントレーナーがコインが足りずに泣く泣くスロットの台上とんぼ返りしていったか。両手両足の指では数え切れないだろう。そんなふうに誰もが欲しがる大人気のポケモンもいれば、なかなかもらいう手が現れないポケモンもいる。

それがわたしが毎朝ボール越しに話しかけているケーшиイだ。

店長曰わく、育てば強いポケモンになるらしいが、はじめのうちは技（ポケモンは技を覚えて攻撃したり自分の身を守ったりする）を一つしか覚えないのでも育てるのが難しく、なかなか欲しがる人がいないのだそうだ。そんなわけで他の景品のポケモンたちが次々にもらわれていくなか、いつもケーшиイだけはひとりぼっちで取り残されていた。そんなひとりぼっちの境遇がなんだか自分の置かれている状況とダブり、わたしは毎朝ケーшиイに話しかけるようになつたのだった。ボール越しのコミュニケーションだったが、いつも眠そくに身体を丸めているケーшиイもだんだん反応を返してくれるようになつた。気づけばわたしはケーшиイを可愛いと思うようになつていた。

しかし、別れは突然やつてきた。

コインケースをパンパンにしたトレーナーがポケモングッズを交換した残りのコインとケーшиイを交換していったのだ。寂しかつたが、可愛がってくれるトレーナーと一緒にいることがケーшиイの幸せなんだと自分に言い聞かせ、笑顔で送り出した。ところが、予想外の出来事が起つた。

「あの、さつきコインとケーшиイを交換してもらつた者なんですけど……」

なんと、さつきのトレーナーが一時間もしないうちに戻つてきて、やつぱりケーшиイを返すと言つてきたのだ。

どうしたらいいか分からず対応に困つていると、トレーナーは「コインもいりません！」と言つてケーшиイ入りのモンスターボールを置いて逃げるようになつた。

店長を呼んで事情を話すと、店長はモンスターボールの中のケーし

イを眺めながら、やれやれと溜め息を吐いた。

「もしかしたらこのケーシィは田辺での特性と性格じゃなかつたのかもしないなあ…」

「特性…？ 性格…？」

首を傾げていると、店長が察したように説明してくれた。

「そういうえば君はポケモンを持っていないんだつたね。ポケモンには特性と性格というものがあるんだよ。同じ種類のポケモンでもそれぞれ持つて産まれた特性も性格も違う。言つてみれば個性みたいなものだね。バトルに有利に働く特性もあれば、逆に不利になつてしまふ特性もある。攻撃力が上がりやすい性格もあれば、防御力が上がりやすい性格もあるみたいな感じにいろいろなんだ」

「なるほど…」

「だから困つたことに、たまーにいるんだよね。野生のポケモンを捕まえても欲しかった特性じゃなかつたからすぐに逃がす無責任なトレーナーがさ」

「それじゃあ、このケーシィも…？」

「うーん…もしかしたらそういうのかもなあ…」

「そんな…」

バトルに役立たないからつて捨ててしまうなんて。そんなトレーナーの勝手な都合で、このケーシィはまたひとりぼっちになつてしまつたのだ。

ボールの中のケーシィはいつも以上に寂しそうに見えた。

「ねえ、君、ポケモン持つてないんだよね？」

出し抜けに聞かれた唐突な店長の言葉に、思わず「え？」と聞き返

してしおりとしたが、すんでのところで口を噤んで頷いた。

「それじゃあ」のケーシィ、君がもらってくれないかな？」

「ええっー？」

突然の提案に、今度こそわたしは驚きの声をあげた。

「見たところこのケーシィも君に懐いてるようだし、そういうふうに助かるんだけど……」

そんなわけで、ケーシィのもらい手は無事に見つかった。わたしは生まれてはじめて自分のポケモンをもつた。

ゲームコーナーのバイトが休みの日、わたしはケーシィを連れてコガネの街や街の郊外にある自然公園を歩いた。

ボールから出たケーシィはわたしの後ろをふわふわと宙に浮かびながらついてくる。クリーム色のエイリアンのような身体が宙に浮いて漂っている姿は、はじめは異様な感じがするが、見慣れるとなかなか愛嬌があるて可愛い。ケーシィもボールのなかにいるよりも嬉しそうに見えた。

ケーシィをもらつてから勉強したことだが、ポケモンには特性や性格以外にも、タイプというものがある。性格とは違い、タイプはそれぞれの種類で統一されているポケモンの属性のようなものだ。

例えば、空を飛ぶポケモンは『ひこうタイプ』、海や川に棲むポケモンは『みずタイプ』というように、この世界にはいろいろなタイプのポケモンが生息しているらしい。

ケーシィはエスパータイプのポケモンだ。エスパータイプは超能力パワーをえるとい。だからこんなふうに念力のように身体を浮かせてわたしの後をついてくることができるのだ。

ケーシィのおかげでわたしは寂しくなつたが、問題はわたしの仕事中にケーシィがボールのなかでひとりぼっちになつてしまつとだつた。今までずっと寂しい思いをしてきた子だ。これからはできるだけそんな気持ちにはさせたくない。

聞くところによると、ポケモンは一人のトレーナーにつき6匹まで手持ちに入れることができるそつなので、ケーシィに仲間をつくつてあげることも可能である。しかし、ポケモンをゲットするために野生のポケモンがいる草むらに入らなければならない。そして必

要に応じてポケモンを弱らせたり、麻痺や眠りなど、状態異常にじてからモンスター・ボールを投げないとゲットできないらしい。果たしてそんなことがわたしにできるのだろうか？

「ガネシティの名所・ラジオ塔の前まで来ると、ケーシイが空中でぐるぐると回転し始めた。きっとラジオ塔の発する電波に反応したのだろう。

クスクス笑つてその姿を眺めていると、ラジオ塔の入口に一枚のポスターが貼られているのが目にとまつた。

『ポケモン譲ります』

さつそくポスターに書かれていた住所を訪ねると、民家から出てきたのは茶色の髪をした陽気な青年だった。

「いやあ～実はイーブイのタマゴがふえすぎてしまつてなあ。わいだけじや手に負えなくなつてしまつて困つてたんや。姉さんもろてくれるんやろ？ホンマに？助かるわあ！おーきに！あ、申し遅れたけど、わいはマサキつちゅーもんや。このへんの奴らからはポケモンマニア呼ばれとる。ビーナよしなに！そんでな、さつそくやけどこいつが姉さんにもろてほしいイーブイや！イーブイでは珍しいやで。可愛がつてやつてなーホンマおーきに！」

マサキさんは怒涛のマシンガントークでたたみかけ、イーブイというポケモンの入ったボールをわたしに手渡すと通信システムのメンテナンスの件で忙しいとかせつかく実家に帰ってきてるのに云々と

何やら早口に言つてすぐ「家のなかに戻つていつた。

呆気に取られてしばらく呆然としてしまつたが、いつまでもマサキさんの家の前に立つ立つても仕方がないので、とりあえず自然公園に移動してボールからイーブイを出してあげた。

ポン！と軽い音を立ててモンスター・ボールから現れたイーブイは、茶色いふわふわした毛皮に包まれていた。ぬいぐるみのような、愛らしい容姿で、まるくて大きな瞳がキラキラと輝いている。尻尾もふんわりと膨らんでいて、顔をうずめたらとても気持ちよさそうだと思った。ケーシィも可愛いと思うが、このイーブイはなんというか、万人受けしそうな可愛さだ。

「よひしくね、イーブイ」

抱っこしようつと手を伸ばしたら、思いつきりそっぽを向かれた。見た目の愛らしさとは裏腹に、このイーブイはどうやら気難しい性格のようだった。

マサキさんから譲り受けたイーブイはわたしの声のことを聞かず、隙あらば勝手に逃走を図るので仕方なくボールに戻した。本当はケーシイと同じようにボールの外に出して連れ歩きたかったが、断念せざるを得なかつた。

これじゃあケーシイと遊ばせるのはこつになるやう……当分先の出来事になりそうだ。

ケーシイと一緒に花壇の前のベンチに腰掛け、田舎ぽっこりをしていると、ミニスカートの女の子に話しかけられた。

「ねえ、あたしとポケモンバトルしない？」

バトルはやつたことがないので断ると、女の子はわたしの隣に座つてうとうとしてくるケーシイを見て残念そうに言つた。

「やつかー。あなたのケーシイ、テレポートしか覚えてなさそうだもんね。じゃあ、バトルができるようになつたらあたしとポケモンバトルしてね！ いつでも連絡待つてるからー！」

そう言ってポケギア（ケータイ電話のようなもの）の番号をメモして渡してくれたが、生憎わたしはポケギアを持っていないので連絡手段がない。

ミニスカートちゃんが去つたあとで、わたしは店長の言葉を思い出していた。

「テレポートか…」

店長に教えてもらったのだが、このケーシィは『テレポート』という技を覚えているらしい。といふか、むしろそれしか覚えていないらしい。ミースカートちゃんに言われたとおりだった。

テレポートはその名のとおり、瞬間移動できる技だという。バトル以外で使うと、近くのポケモンセンターまでトレーナーを連れて一瞬で移動できるので、とても便利な技だと店長から聞いていた。ポケモンセンターとはポケモン専用の医療施設ともいおうか、ケガをしたりバトルで疲れたポケモンの回復や治療をしてくれるところだ。ゲームコーナーの近くに建っているので毎日見慣れてはいたが、わたしは一度も行ったことがなかった。

もしかしたらいい機会かもしれない。せっかく便利に技を覚えているのだから、ちょっと使ってみよう。

わたしはケーシィの手を握り、ドキドキしながら技を命じた。

### 「ケーシィ、テレポート」

瞬間、身体がフツと軽くなり一瞬だけ宙に浮いたような、奇妙な浮遊感がした。しかしそうにその感覚は消え去り、重量が戻ってきた。思わず瞑つてしまっていた目を開くと、目の前に袴姿の男の子が立つていて、酷く驚いたような顔でこちらを凝視していた。

## キキョウジム

辺りを見回して、どう考へても違うと本能が告げていたが、万が一のこともあるかもしないと思い、一応尋ねてみた。

「ここってポケモンセンターですか？」

「え？…ここにはポケモンジムですか。キキョウジム」

「キキョウー？」

予想外の返答に慌てておじいさんから借りているタウンマップを取り出して確認する。

キキョウ、キキョウ……あつた！キキョウシティ！

地図を見ると、何故かケーシィとわたしはコガネシティからずっと東にあるキキョウシティという街にワープしてしまったらしい。最寄りのポケモンセンターまでテレポートする技だったはずなのに、どうしてこうなったのか。

首を傾げていると、袴姿の男の子が納得したように言った。

「もしかして、あなた挑戦者ですか？さつきはいきなり現れたからびっくりしたけど…それなら話は早い。さっそくバトルしましょう！」

「え？…バトルって…」

「おれはキキョウジムのジムリーダー、ハヤト…ひこうタイプのH

キスパート…じぞ、尋常に勝負ッ！」

「え？…ひょ…えええ…？」

あれよあれよという間にポケモンバトルが始まってしまった。もうわけが分からぬ。

ハヤトと名乗った男の子がモンスター・ボールを投げると、中から鳥型のポケモンが颯爽と登場して、素早い動きでわたしとケーシイの周りを飛び回って翻弄した。

とつさにケーシイにテレポートを命じたが、テレポートはバトルではまったく役に立たなかつた。そうこうしているうちにケーシイが鳥ポケモンの体当たりを受けてしまい、慌ててボールに戻す。するとその瞬間、ポケットに入っていたもう一つのボールが揺れたかと思うと、ポン！と音を立てた。

「イーブイー？」

なんといーブイが勝手にボールから出てきたのだ。すぐに鳥ポケモンの標的が変わり、イーブイ目掛けて突進してくる。

「よけて！イーブイー！」

しかしイーブイはわたしの命令を聞かず、ケーシイと向じように体当たりをまともにくらつてしまつた。そして続けざまに大きな翼で叩かれ、機嫌を損ねたのかまた勝手にボールに戻つてしまつた。

こうしてわたしの初のポケモンバトルは散々な結果に終わったのだった。

## キキョウジム？

「えっ、挑戦者じゃない！？」

「はい…」

涙目で事情を説明したら、袴姿の男の子、ハヤトくんがポケモンバトルの基礎やポケモンジムについて教えてくれることになった。

ハヤトくんの説明によると、ポケモンジムとは、ポケモントレーナーがバトルの実力を試す道場のような施設だという。

ポケモンリーグ協会から認可を受けたポケモンジムは、ジムリーダーと呼ばれる代表者によって管理されており、そのジムリーダーに勝利し、実力を認められたトレーナーには公認ジムバッジが授与される。そして各街のジムリーダーに勝利し、8つのバッジを集めきったトレーナーだけが、ポケモンバトルの最高峰といわれるポケモンリーグに挑戦できる資格を得るのだという。言うなれば、ポケモンジムとはポケモンバトルを極めるトレーナーにとっての登龍門といつわけだ。

ハヤトくんもそんなジムリーダーの一人で、彼はキキョウシティのキキョウジムで、毎日のようにバトルを挑んでくるトレーナーたちを迎えるに切磋琢磨しているのだ。そんなポケモンバトルの実力者に、バトルど素人のわたしがまともに闘えるわけがなかった。本当なら勝負を挑むことすらおこがましいのだが、どういうわけかケーシイのテレビポートが原因で手合わせすることになってしまったのだった。

そういえば、コガネシティにもジムがあつたような気がする。ジムリーダーはどんな人なんだろうか。今までまつたく興味がなかつたが、ハヤトくんの話を聞いて少し気になり始めた。

「ところで、さつきのイーブイは人からもらったポケモンですか？」「はい。今日譲つてもらったばかりのポケモンで、まだ全然懷いてなくて…」

さつきのバトルでもわたしに懷いていなかつたから言つことを聞いてくれなかつたのかと思ったが、どうやらそつではないらしい。人からもらったポケモンはレベルが高いと新しいトレーナーの命令を無視してしまうことがあるのだ。

レベルというのは、ポケモンの強さを表す数値のよつなものであり、一般的にこの数値が高いポケモンほどバトルに強いとされる。野生のポケモンを倒したり、トレーナーとのバトルに勝利したりすると経験値がもられ、その経験値をためることでレベルが上がる。トレーナーたちはポケモンのレベルを上げるためにトレーニングをしてバトルの腕を磨いているのだ。

「今は命令を無視するかもしれないけど、あなたにトレーナーとして実力がつけば、自然に言うことを聞いてくれるようになると思います。ケーシイもテレポート以外の技を覚えたり進化すれば強くなるし、きっとあなたも強いトレーナーになれますよ！」

「そつでしょうか…」

わたしが強いトレーナーに…。そつ言われてもいまいぢピンとこない。

「手持ちのポケモンは全部で6匹まで持てるので、あとはもっとポケモンをゲットすることですね」

「ゲット、ですか」

「はい。おれはひこうタイプのジムリーダーだから、鳥ポケモンを育ててますけど、ふつうはいろいろなタイプをバランスよく育てるのが理想かな。ああ、でも、ひこうタイプはオススメですよー。」

それからはハヤトくんによる鳥ポケモンの魅力紹介コーナーになってしまった。翼のフォルムがどうのこうの肩にとまって毛繕いして、姿が云々と、ひこうタイプのポケモンがいかに華麗で美しいかの話が永遠に続く。

「あ…す、すみませんすっかり話し込んでしまって…」こつらは父さんからもらつた大切なポケモンだから、つい熱くなつてしまいました。ちなみにこのポッポはピジョンに、ピジョンはさらにもう一段階進化するんですよ。ピジョットってこう、すぐく綺麗で大きな鳥ポケモンなんです」

「ピジョットか。どんなポケモンなんだろう。」  
ゼひ見てみたいと思つたが、生憎ハヤトくんの手持ちにはいらないらしい。

「ポッポをゲットして育てればいいですよ。ポッポならすぐ近くの31番道路にたくさんいるし……あ、そうだ！突然バトルを仕掛けてしまつたお詫びに、これをどうぞ…」

差し出されたのは、中身の入っていない空のモンスターボール。

「野生のポケモンはゲットしたことがないんですね？草むらからポケモンが飛び出してきたらこのボールを投げてみてください。ポッポなら比較的簡単に捕まえられると思いますよ」

そんなわけで、「ガネシティに帰る前に31番道路へ寄り道することにした。

## キキョウシティ

「モンスター・ボール、ありがとうございました。頑張ってポッポをゲットしてみます」

いろいろお世話になつたハヤトくんにお礼を言つ。そのまますぐに出発しようと一度は背を向けたが、立ち去り際、もう一度ハヤトくんの方へ振り返つた。

「もしもわたしが強いトレーナーになれたら、その時はもう一度バトルしてくれますか」

ハヤトくんは一瞬目を見張つたが、すぐに「もううん」と笑顔を返してくれた。

ジムの外に出ると、そこはキキョウシティ。

昔の古い街並みを残したような家屋が建ち並んでおり、街の北側には古めかしい塔が街を見守るようにそびえ立つていた。タウンマップによると、あれは『マダッボミの塔』といひじご。

さて、31番道路までは歩いてすぐのようだが、その前に確かめておかないといけないことがある。

わたしはケーシィをボールから出した。ハヤトくんのポッポから体当たりを受けていたが、わたしがすぐにボールへ戻したためかダメージも少ないようだ。ボールから出れて嬉しいのか長い尻尾をユラリと振つている。

そもそもわたしがこんなところに来てしまったのは、どう考へても

ケーシイのテレポートのせいである。テレポートは近くの街のポケモンセンターへ移動する技だと聞いていたが、それが何故キキョウシティのポケモンジムなどといつ突拍子のない場所にワープしてしまったのか。

だから、わたしはもう一度試してみる必要があるのだ。  
街中を見回し、ポケモンセンターの屋根を見つけると、ケーシイにそこを指差して言った。

「ケーシイ、あっちはポケモンセンターが見えるよね？そこまでテレポート！」

フツと身体が軽くなる感覚。

次の瞬間、強い風を感じて身体がぐらりと揺れた。

「え……？」

何事かと目を開けて、その光景に絶句した。  
わたしは空の上にいた。

あまりの高さに膝がガクガクと震えて思わずその場にしゃがみこんでしまった。

遙か眼下に「ニーチュア模型のよつな街並みが見えた。どうやらわたしいる場所はものすごく高い塔の天辺らしかった。頭頂部が踊り場のようになつていて、やけに広いスペースがある。

一瞬ここはマダラボミの塔かと思ったが、すぐに違つことが分かつた。

それほど遠くない距離に「ガネのラジオ塔が見える。と、いうことは位置関係から考えてここは 強風に飛ばされないよう細心の注意をはらつてタウンマップを取り出し、紙面の上の街を指でなぞる。ここは「ガネの北にある街、エンジュシティで間違いない。エンジュには塔が二つあるが、片方の塔は火事で焼けてしまったがあるので、必然的にここはスズの塔ということになる。

キキョウのポケモンセンターに行くはずだったのに、どうしてこんな標高2メートルもある塔の天辺にいるのか。わたしは、隣でとぼけた顔をしているケーシィを見た。

「もしかしてあなたつて方向音痴…？」

ケーシィはわたしの言葉を理解しているのかいなか、くいっと首を傾げた。

疑問は確信へと変わる。

この子は方向音痴なんだ！ それも、重度の。

今さらながら、あの時コインとケーシィを交換したトレーナーがすぐケーシィを返しにきた理由がわかつたような気がしたが、わたくしにひとつはそんなことはどうでもいい問題だ。

今はここからどうやって下に降りるかを考えなくては。

高さに怯えながら知恵を振り絞っていたその時、ふいに今までに感じたことのないような風が吹いた。バサツバサツと羽音が聞こえて振り向くと、わたしの後ろに一羽の巨大な鳥ポケモンが舞い降りていた。

その翼は虹色に輝き、立派な嘴は威風堂々とした風格があった。わたしはその神々しいまでの美しさにすっかり魅せられていた。鳥ポケモンはわたしの存在などまったく意に介さず、悠々と鎮座していた。

ハヤトくんの言葉を思い出す。

『ポッポはピジョンに、ピジョンはさらにもう一段階進化するんですよ。ピジョットっていう、すごく綺麗で大きな鳥ポケモンなんです』

もしかしてこのポケモンがハヤトくんの言っていたピジョットなのだろうか。

なんとなく違うような気がしたが、わたしはハヤトくんからもらった空のモンスター・ボールを取り出した。

『ポケモンが飛び出してきたらこのボールを投げてみてください』

言われた通りにモンスター・ボールを投げる。

わたしの手から放たれたモンスター・ボールは放物線を描き、ピジョットのお腹のあたりにポンと当たると、一瞬にして巨大なピジョットの身体を飲み込んでいた。ボールはしばらく小刻みに揺れていたが、見守っているうちに動かなくなつた。

動かなくなつたモンスター・ボールをおつかなびっくりに拾い上げる。

これは、ゲット成功とみていいのだろうか。

ボールの開閉スイッチを押すと、なかからピジョットが飛び出してきた。ピジョットはいきなりボールのなかに閉じ込められたといふのに一切暴れる」となくおとなしかった。

「あの…… むろじへね？」

話しかけてみても鳴き声を上げることもなかつた。

どうやらこのピジョットは威厳たっぷりの見た目とは裏腹に穏やかな性格らしかつた。どこかのイーブイとは大違いだと思つてゐると、それに抗議するようにポケットのボールがガタガタと揺れた。

## スズねのこみち

背中にわたしを乗せ、ピジョットは塔の頂上から滑空した。わたしは振り落とされないよう必死にしがみついていたが、ピジョットは風の抵抗などまるでないかのように優しく飛んだので、不安は杞憂に終わった。

塔の下に着地したピジョットの背から飛び下りると、そこは紅く色づいた紅葉が舞う小路だった。

「運んでくれてありがとう」

ピジョットをボールに戻そうとして、思いとどまつた。こんなに大きく立派な翼を持つ鳥ポケモンを再びボールのなかに閉じ込めてしまつたら可哀想な気がしたのだ。

「……」

しばらく悩んだが、結局ピジョットを逃がしてあげることにした。ピジョットは一瞬戸惑つたような様子を見せたが、すぐに美しい虹色の翼を広げ、エンジュの空に飛び去つていった。

わたしもゲットしたポケモンをすぐに逃がす無責任なトレーナーの仲間入りをしてしまつたが、後悔はしていない。これでよかつたのだ。あの虹色の翼は大空を舞うのにふさわしい。幸い、ハヤトくんからもらったモンスターボールはまだ残っているので、ポケモンはまたこれから草むらにでも行ってゲットすればい

い。それにポケモントレーナーになりたてのわたしにはポッポをゲットしてちゃんと一から育てるほうがいいと思った。

「ホウオウの気配を感じて来てみれば…。君はいつたにビックリでこく入り込んだのかな？」

ピジョットを見送っているときなり背後から声をかけられた。驚いて振り向くと、いつの間にかわたしのすぐ真後ろに紫色のマフラーをまいた青年が立っていた。

「あなたは…？」

「僕はマツバ。千里眼を持つ修験者」

どうしよう。

電波かもしれないこの人。

マツバと名乗った青年は言い知れぬオーラを醸し出していた。本能がその危険な香りをいち早く察知したのか、わたしの足はマツバさんから逃れるように後退りした。

だが、マツバさんとはつきり目が合った瞬間、まるで蛇に睨まれた蛙の「」とく一歩も動けなくなってしまった。

「君に話がある。僕と一緒に来てくれるよね？」

わたしにできることはないとなしく頷くことだけだった。

マツバさんに連れてこられた場所は、先ほどの小路を塔と反対側に抜けた先にある、スズの塔の関所と呼ばれる場所だった。

出会う人は皆、頭をまるめ修行僧のよつな格好をしたお坊さんばかりで、彼らはマツバさんが通ると頭を下げ、黙つて道を譲つた。

そこを当然のように悠々と歩く彼 マツバさんとはいつたい何者なのだろうか。お坊さんたちの態度やさつきの得体の知れない威圧感を見るに、ただ者ではないことは明らかだった。

「君、どこから来たの?」この世界の人じゃないよね

出し抜けにそう言われ、心臓が飛び出るかと思つた。

スズの塔の関所の一室、畳と障子のある和室でわたしはマツバさんと向かい合つて座つていた。

どうしてわかつたのか。

にわかに信じられない思いでこれまでの経緯を簡単に説明しつつ尋ねてみると、返ってきたのはやはり電波っぽい返答だった。

「僕には千里眼があるからね。ある程度のことはわかるんだよ」

どんなリアクションを返せばいいか分からず固まつていると、マツバさんはそんなわたしに構わずに言葉を続けた。

「実は、君がここにくる」とはすいぶん前から感じ取つていた

「そ、それじゃあ…元の世界に帰る方法を」存知なんですか…？」  
「…残念ながらそれはわからない」

落胆するわたしには相変わらず構わず、彼は続ける。

「僕には見えるだけで、君を元いた場所に帰してあげることはできない。でも、助言することはできる 例のものを」  
「へへへ」

マツバさんが呼ぶと、部屋の外に控えていたお坊さんが一礼して入室してきた。

その手には何故か、リュックサックが抱えられていた。

「君は」の世界を旅する必要がある。そうすればきっと元の世界に戻るための手がかりが見つかるだろ？。これは僕からの餞別だ」

餞別と称して差し出されたのは、今しがたお坊さんが運んできたりユックサックだった。

マツバさんのマフラーと同じ紫色のそれには、オバケのよつなキャラクターがワンポイントに小さく刺繡されていて、なんだか可愛いと思つた。

戸惑いながら受け取つたそれにはずしりと重量があつた。中に何か重たいものが入つてゐるらしい。とりあえず礼を言つと中を見るよう促されたので、恐る恐るリュックを開いてみる。

なかから出でたのは不思議な模様のある大きなタマゴだつた。

「これはポケモンのタマゴだよ。元気なポケモンと一緒に連れ歩けばやがて中からポケモンが生まれるんだ。生まれたポケモンはきっと君の冒険の役に立つだろ？」

冒険も何も、わたしはこれから「ガネシティ」に帰るのだ。せっかく  
餞別をくれたマツバさんには悪いが、わたしは旅に出る気はなかつ  
た。確かにカントーへはいつか行ってみようと思っていたが、ゲー  
ム「ポーナー」での仕事もあるし、手がかりを探す旅に出るのはもっと  
先のことになると想つ。

餞別を受け取つておいてからそのことを語つのは気が引けてしまつ  
て、さてどう説明しようか歎んでいると、ポケットのボールが揺れ  
てイーブイが飛び出してきた。

「あ、こちらまた勝手に出てきて……！」

イーブイはトレーナーであるわたしの注意を無視し、ポケモンのタ  
マゴの匂いをしばらくクンクンと嗅いでいたが、すぐに興味を失つ  
たのか、また勝手にボールに戻つていった。

マツバさんがその様子を見てクスリと笑つた。なんだか決まりが悪  
くて、わたしは顔が赤くなるのを感じた。

恥ずかしさを紛らわすために今度はボールからケーシイを出した。  
ケーシイは初めて見るポケモンのタマゴが物珍しいのか、興味津々  
にリュックの中をのぞき込んでいた。

「ところで、これから君はまたそのケーシイでテレポートするのか  
い？」

「いえ、テレポートはしないで歩いて帰　」

瞬間、わたしの身体は例の浮遊感に包まれた。

最後まで言葉を言い切ることなく、わたしは、テレポートを命じら  
れたと勘違いしたケーシイによつてマツバさんの前から忽然と消え  
去つていた。

「君の旅路に幸多からん」とを

わたしが消えた和室でマツバさんがそう呟いたが、もちろんわたしの耳に届くことはなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2225z/>

---

Role Playing Girl!!

2011年12月25日23時02分発行